2021年度　自己点検・評価報告書

文学研究科評価分科会

2022年3月

基準１　理念・目的

- **学部・研究科の目的を適切に設定しているか。**
- **学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。**

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
①　2020 年度の文学研究科評価分科会において、本学の理念をさまざまな言語で、海外にも積極的に発信してはどうかという要望があった。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
①　【１】①については、本研究科独自で行うことが困難なことが確認され、しばらくの間保留することになった。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
①　理念・目的の学生への周知のため、オリエンテーションなどの場を利用して研究科長よりその説明を行った。

基準４　教育課程・学習成果

- **授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。**
- **授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。**
- **教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。**
- **学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。**
- **成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。**
- **学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。**
- **教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
①　2020 年度の本学の自己点検評価報告書に対し、2021 年の大学基準協会の認証評価において「＜基準４　教育課程・学習成果　＞文学研究科社会学専攻博士前期課程及び同後期課程の学位授与方針は、修得すべき知識、技能、態度等の当該学位にふさわしい学習成果を示した内容となっていないため、改善が求められる」と指摘された。 ②　2020 年度に外部評価委員より「大学のディプロマ・ポリシーと学部・研究科のディプロマ・ポリシーとの整合性」や「学部のディプロマ・ポリシーと LOs の関係性」に関する指摘があった。

＜以下は 2020 年度文学研究科評価分科会での指摘事項＞
③　「授業振り返りシート」の活用方法の改善について。これまで振り返りシートや科目ルーブリックを実施することに力を注がれ、その活用は各担当教員に放任されてきた。
④　履修者数に多寡に関わらず公平感のある成績評価をするよう教員相互の共通理解の促進を促す。
⑤　評価分科会への学生参加を促進する。
⑥　博士審査の基準と水準の統一を図る。
⑦　日本語教育専修の学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性の検証を行う。
⑧　English Medium Program を充実する。
⑨　アセスメント・ポリシー（プラン）に基づく学習成果の測定と検証を充実させることにした。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）

①　【１】①の指摘について。社会学専攻では学位授与方針をディプロマポリシーではなく、アセスメント・ポリシーに記載のアセスメント項目に掲げていた。そこで、何らかの機会を得てこの項目をディプロマ・ポリシーに移動する計画である。
②　【１】②の指摘について。本研究科では 2023 年度にカリキュラムの改定を予定している。ただし、これは学部のカリキュラム改定とも連動しており、その基本方針がある程度固まった段階から開始することにした。
③　【１】③の「授業振り返りシート」の活用方法の改善について。今年度は専攻を越えて積極的な議論を進めることにした。
④　【１】④について。今年度は様々な場を利用して教員相互の共通理解の促進を促すことにした。
⑤　【１】⑤について。学生参加の評価分科会を利用して学生と検討することにした。また、参加が困難な学生のことも考慮して、授業改善に関する Google form アンケートを実施することにした。
⑥　【１】⑥について。今年度は様々な場を利用して教員相互の共通理解の促進を促すことにした。
⑦　【１】⑦について。専修内での教員相互の共通理解の促進を促すことにした。
⑧　【１】⑧について。文学研究科委員会に諮ることにした。
⑨　【１】⑨について。各専攻で共通する指標は、成績 GPA、修士論文評価点、演習におけるプレゼンテーション完成度、学会研究発表数、投稿論文数および採択論文数なので、これらについての経年変化を調査することにした。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針

①　【１】①およびの【１】②について。学部でのカリキュラム改定がいまだ決定していないので、本年度では各専攻・専修のカリキュラム検討委員を選出し、今後の日程を取り決めるにとどまった。また、社会学専攻のディプロマポリシーについては、2021 年度に改定してもすぐに 2022 年度に改定する可能性があるので、2022 年度に改定することになった。

②　【１】③について。今年度の学生参加の評価分科会で話し合う予定である。
③　【１】④について。研究科委員会等の場で話し合い、教員相互の共通理解が非常に高まった。
④　【１】⑤について。今年度の学生参加の評価分科会で話し合う予定である。また、授業改善に関するGoogle formアンケートを実施した。
⑤　【１】⑥について。研究科委員会やコースワークの場で話し合い、教員相互の共通理解が非常に高まった。
⑥　【１】⑦について。日本語教育専修内で話し合い共通理解が非常に高まった。
⑦　【１】⑧について。文学研究科委員会の場で話し合い、暫くの間は実施が困難なので保留することになった。
⑧　【１】⑨について。今年度は時間が無く、十分に用意することができなかった。

基準５　学生の受け入れ

- **学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。**
- **学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。**
- **適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。**
- **学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

【１】2020年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項

＜2020年度の外部評価委員からの指摘事項＞
①　入学定員充足率が低い専攻もあるので、もっと研究科の魅力をアピールする必要が指摘された。

＜2020年度文学研究科評価分科会での指摘事項＞
②　日本語能力が十分でないが、博士後期課程に進学を望む外国人留学生への対応の必要が指摘された。

【２】2021年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）

①　【１】①について。学外・学内の学生に向けたアピールのため、卒業生の活躍ぶりを紹介することが重要なので、例えば卒業生の進路調査を行うことが提案された。その一つとして、本年度は大学教員・中高教員の数など、１つでもそれを示すような調査を実施することが提案された。
②　【１】②について。文学研究科委員会で検討することにした。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
①　【１】①について。卒業生進路調査は非常に困難であるが、現在、教員数については少しずつ調査中である。なお、日本語教育専修では、2022 年 1 月 13 日付文化庁の「日本語教師養成研修実施機関実態調査」に回答するため、卒業生進路調査を実施した。 ②　【１】②について。文学研究科委員会で検討した結果、制度的に改定することは困難であり、当分は各教員が個別に対応することにした。

基準６　教員・教員組織

- **大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部･研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。**
- **教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。**
- **教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。**
- **ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。**
- **教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
①　以前より教育学研究科の創設が計画されていたが、いよいよ 2022 年度より創設することになったので、そのための準備を進める必要が生じた。 ②　学部とは独立した形の FD 活動をどのように実施すればよいのか、検討することになった。 ③　現在、一部の教員には多くの授業負担がかかっているので、カリキュラム改定を機会にそのかいぜんが指摘された。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
①　【１】①について。人事などの点で遺漏なきよう務めることにした。 ②　【１】②について。文学研究科委員会の場で検討することにした。 ③　【１】③について。各専攻・専修内で検討することにした。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
①　【１】①について。教育学部と十分な連携をとって教員人事や学籍異動などで混乱がないような体制を整えた。

②　【１】②について。文学研究科委員会の場で検討したが、十分な成果は上げられなかった。 ③　【１】③について。各専攻・専修内で現在も検討中である。

基準７　学生支援

- **学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。**
- **学生支援の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
特になし。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
①　コロナ禍の中で学生に不利益が生じないように注意する。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
【２】①について。様々な課題があったが、現在のところ、大きな問題点はないようである。

基準９　社会連携・社会貢献

- **社会連携･社会貢献に関する方針に基づき､社会連携･社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。**

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
特になし。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
①　心理教育相談室の活動を充実させる。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針

①　【２】①について。遠藤室長を中心に相談室の活動の充実が図られた。その詳細は、『創価大学心理教育相談室年報』第 19 号に記載されている。